日本医科大学付属病院
NIPPON MEDICAL SCHOOL HOSPITAL

NMSH TOPICS

VOL.2　2017／1月

坂本篤裕 院長

今月の院長のイチオシ！『呼吸器内科』

地道な予防啓発と適切な診断、タイムリーな連携で高齢者肺炎の脅威を食い止める

日々の口腔ケアとワクチン接種で肺炎リスクを遠ざける

「肺炎は老人の敵※である」内科医ウィリアム・オスラーが自らの著書でこう述べたのは、今から100年以上昔のこと。21世紀の現代においても、肺炎はわが国の死因第3位、80代では2位、90歳以上では1位となり、高齢者の生命を脅かしています。

では、肺炎をどう防ぐか。まず高齢者に最も多く見られる誤嚥性肺炎は、清潔な口腔環境が予防のカギを握りますので、日常的な口腔ケアを積極的に勧めたいところです。高齢者肺炎の起炎菌として最も多い肺炎球菌（約20％）には、ワクチンが有効です。インフルエンザウイルス性肺炎も、85歳以上では約6％が罹患するとあって無視はできません。こちらも流行前の予防接種が重要となります。

抗菌薬の適切な使用が重症化を防ぐ最長2週間で治癒へ

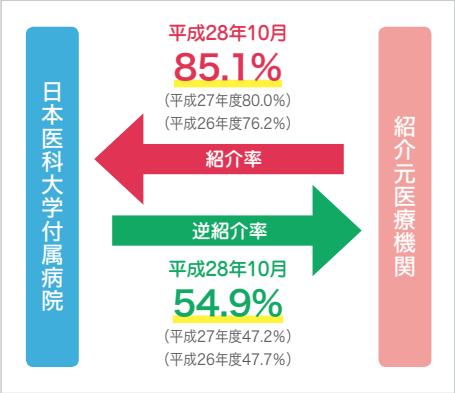
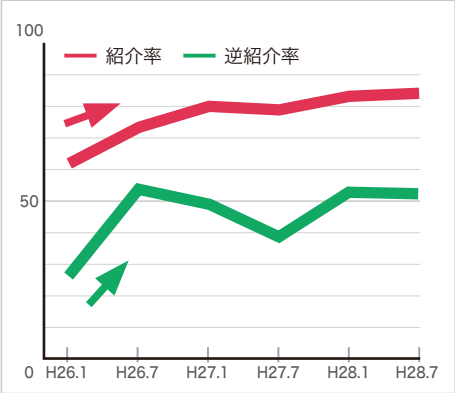
肺炎が疑われる場合は、喀痰細菌学的検査を提出し、抗菌薬の投与を開始します。以後は、起炎菌がカバーされていれば、長くても2週間で症状は見られなくなるでしょう。

ただし発熱・咳が2週間以上続く、肺に空洞や粒状影が見られる、免疫抑制状態にあるといった場合は、結核の可能性も否定できません。抗酸菌検査（塗抹・PCR・培養など）も併せて行う必要があります。

治療を施しても改善が見られないときは、膿瘍化、非定型細菌、結核などの抗酸菌感染、肺真菌症、肺気腫を背景とした遅延、好酸球性肺炎や器質化肺炎などの非感染症疾患、腫瘍などさまざまな病態が考えられます。気管支鏡検査が必要なケースもありますので、当院呼吸器内科へお気軽にご紹介ください。

※オスラーは後に、「肺炎は『敵』ではなく、安らかな死をもたらす『友』と呼んでいいだろう」と自ら改訂しています。

日医大NEWS

紹介率・逆紹介率が年々増加しています！

当院の紹介率・逆紹介率は、平成28年10月で紹介率は85.1%、逆紹介率は54.9%（診療報酬上）であり、共に増加傾向にあります。高度急性期を担う病院として、地域医療機関との役割分担を推進、連携が強化されていることが分かります。これからも当院で治療が終了したのちに患者さんを地域医療機関に戻す努力を継続してまいります。